同情と力：ニーチェと金子文子の虚無主義の差異かつ無政府主義との適合性

報告者：Dolinšek, Sašo（大阪大学人間科学研究科、博士後期課程）

司会者：杉田孝夫(お茶の水女子大学・emeritus)

　本稿では、金子文子とニーチェの思想を比較し、それらの無政府主義との統合性を考察する。両者は虚無主義を中心的な概念とし、当時の既存の価値観を非難した。しかし、どちらも虚無主義に共通しているにもかかわらず、二人は大いに異なる結論を出した。ニーチェは平等が人工的かつ虚無的な価値であり、個々人を分類する強弱の差を隠す道具でしかないと言っている一方で、金子は既存の価値観が実際に虚無であるとすれば、人間は本来平等であると推理している。平等に関する金子の肯定的な思想は、強弱の差を重視するニーチェの思想よりも、あらゆる支配を否定する無政府主義に適っていると筆者は論じる。

二人の会員から４点について質問を受け、以下のように応答した。

1. **金子文子の思想はどのような経緯で形成されたか。**

　金子の執筆した文章が少ないため、その経緯をさかのぼることは容易な課題ではないが、自伝と裁判や取り調べの記録を参照すれば、その思想形成について少し推測できる。彼女は1921年に上京してから、学校の友人にシュティルナー、ニーチェ、アルツィバーシェフといった3人の思想家を紹介されたことをきっかけに、虚無主義に近づいていく。しかし、この虚無思想が思想的転向を決定したのではなく、苦痛や虐待、搾取や抑制に満ちた彼女の経験によって形成された世界観に哲学的な表現を与えただけである。例えば、金子は一度キリスト教や社会主義に近づいたこともあるが、議論上の相違というより、それらの唱道者の偽善的な行動によって、それらにも幻滅した。

1. **同情とエゴイズムは相いれないものと一般的に思われるが、金子はそれらをいかに調和させたか。**

　彼女は確かに自我を何よりも重要だと考えているものの、それを固定したものではなく、伸縮性を持つものとみなしている。したがって、人は他者の中であっても自身を見出し、その自身を愛することができる。しかし、これは利他主義ではなく、単なる伸張した自我としての自愛であるがゆえに、利己主義である。金子の場合においては、彼女の自我は、自身と同様である被抑制者を全て含めるほど伸張しているため、包括的かつ深い同情ができるといえる。

1. **なぜ二人を比較することにしたか。そこにはいかなる関係があるだろうか。**

　ニーチェの思想、特に既存の社会を根拠づけている価値観に対する辛辣な批判は、既存の社会制度の破壊を目指す、ゴールドマンを皮切りにした様々な無政府主義者によって高く評価されてきた。しかし、筆者は彼の思想、殊に強弱の差によって人々を分類する一要素は、あらゆる上下関係を廃止しようとする無政府主義とは統合しにくいと考えている。その一方で、金子はニーチェの影響を認めていることに加え、虚無主義を彼と同じく自身の思想の中心的な位置に据えている。しかし類似した前提から出発しているにもかかわらず、彼女は、平等に関して正反対の結論にたどり着いている。そこで筆者は、既存の価値観に対する否定など、無政府主義者にとってニーチェの思想の魅力的な点を金子のそれにも見出しつつ、強弱の差による人間のカテゴリー化といった、無政府主義との間で起こる矛盾の無い虚無思想を提示しているのである。

1. **金子の思想では、破壊以外の側面、つまり何かの秩序をめぐる議論があるか。**

　彼女は革命後の社会組織に関する議論にはほぼ触れていない。第一に、個人主義者として、個人としての自身を守ったり進めたりすることに重点を置いた。自身を抑えている権力を倒すべきだとは思っていたものの、倒してからの具体的な社会組織にはさほど興味を示していない。第二に、虚無主義者として、社会主義者の目指す社会組織が実現可能だという観点には大きな疑念を抱いていた。彼女は生涯において数多くの人間から無慈悲な扱いを受けたため、社会に対して極めて深い不信を抱くようになったのである。